

【研究ノート】

道内「H」紙に報道された 社会教育活動の一側面

齋 藤 勉

(1)

「生涯教育」媒体として、日本人が最も多く利用しているものは、藤田等¹⁾の調べによると次のような順位で示される。第一位：新聞、雑誌、その広告や紹介記事、第二位：友人、知人などによる直接の口こみ伝達、第三位：テレビ、ラジオ放送などである。また、各々の利用占有率は、上位から、58.9%、43.4%、そして38.6%と示されている。

印刷物ならびに活字による伝達が最上位を占めているのは、わが国の文盲率の低さを示すものであろう。また、他方、出版、印刷術の高度化とその普及が並行発展し、大量生産が可能となり、「少しまてば読める」から「いま直ぐ読める」に遷移をみせた出版物輸送現象も見落すことはできない²⁾併せて、昭和25年、国土総合開発法が制定されて以来、わが国内の道路及び交通網の整備が着々と実現し、今日における「生涯教育実践」の流布と呼応して、その媒体の第一位を占めることになるのであろう。

第二位の友人・知人による口こみ伝達方法は、従来、口書形式による手紙等も多くもちいられた一つであるが、電信電話の普及³⁾につれ、遠距離間交信による連絡網の整備が実現してゆく。そこには、いわゆる“親密な見えざる学習集団”の発生を散在的に派生することになる。この集団内メンバーは特殊化された符号(サイン)によって‘抽象化された経験’を再生・拡大することに依り、より密度の濃い親密な見えざる学習集団を形成してゆく³⁾

第三位の放送は、上述二種とは別個の録音録画などによる保存システムが開発され、生涯教育放送用の形態に‘集団学習’、‘個人学習’の二方法途を産出させた。これは、社会教育活動の分野に“通信教育”の流動性を

物理的な力で定礎させた一方法であり、目下開発途上にある I.N.S の出現に依り、新規の学習集団を派生かつ産出させることであろう。この新しい集団は、上述 1~3 を、混入させたものと予想され、いかなる形・容態を出現させうるのか、予想また想像を絶する難課題を我々に与えてくるものとも思われる⁴⁾。

さて、我々は、社会教育活動が、日常算えきれない程、多く企画・実行かつ実践されていることを識っている。その参加者数も多く、年齢面においても各層が存在する⁵⁾。また、社会教育活動の実践現場に目を移すと、各参加者居住区域内でおこなわれているものを、他者居住区域内にまで拡大しておこなうなど、実に複雑多岐に亘る。各参加対象者の人格、群像など外見表出印象等で、その活動の(社会的)価値評価をおこなってしまいがちであった従来の方法では、価値評価も不充分かつ不可能というらく印をおされはじめてきたことも公にせねばならなくなってきた⁶⁾。さらに、社会教育活動に対する社会的価値評価、判断は、「活動」企画の始動以後になされるよりも始動以前また終了直前においてなされ、その評価は、時として、活動の再起不能をもたらすに充分な中傷的なものさえ存在する。なぜこのような残念なことがあるのであろうか。耳にすることは、社会教育活動が、行財政上の活動源泉予算について不確定であっても「職員の工夫しだいで活動も可能。金はなくても大丈夫! きこえはよくないが、社会教育活動に日常参画しなくとも人間の日常生活に何の支障があろうか…」の世評表現も有る。一面から観ると、これは、社会教育活動指導者の力量評価につながることにもなり、さき程の価値評価・判断は、その指導者の力量に対するものも含まれ、そこには偏見さえもみられるのである⁷⁾。

「生涯教育」が社会教育の基盤として漂動して以来、生涯教育の媒体として、第一位に新聞、雑誌、その広告や紹介記事であることは、報道という面からの社会教育活動の認知そのものに対して、社会教育活動が公的(自治体行政指導及び主催)なもの、また、私的(民間指導及び主催)なもの、を問わず、活動評価に大衆の中立性を付与するものであり、かつ、中立性を付与しつつ読者(層)をして、自己の所属する社会教育活動に内省と自己観察という刺激をかもし出す作用をうみ出すものでも

ある。

このように考えるならば、新聞で報道⁹⁾された社会教育活動の一側面を垣間みることは、社会教育活動及び方法について、その地域に関連存在する社会教育施設を地域住民がどう観ているか、をさぐる目安の一つとなるろう。

(2)

上に述べた媒体を道内「H」紙⁹⁾にもとめ、社会教育活動のうち、主として、科学、芸術という大きなジャンルに限定してみた。この二大ジャンルに限定した理由は次の二点による。

(1)公民館、科学館、博物館(含美術館)は社会教育活動の中核的施設であると同時に、その活動内容、事業内容は地方自治法の諸目的と合致するよう「その地域の特性、事情を充分考慮し、かつその地域の人々の協同生活の健全な発達を保障することを目的とする」という根本思想で事務機構構成を行ない、そのために、道内各地方自治体にあつては、社会教育活動から派生してくる諸問題解決をなすレファレンス・サービスとして学校開校、図書館による児童文学学級の開設、難視聴力・障害者に対する学習援助等を設けるが、これら受け皿的存在を印刷物、活字等で補助的・補足的援助をなすものとして、公共図書館があげられる。ところが、公共図書館蔵書構成全般を観てみると、科学、芸術分野の構成率は、地方自治体の図書館によっては、皆無にひとしい状態であるところもあり、レファレンス・サービスの施設としては、機能マヒの状態を余儀なくされているところもある。このような現象をもつその(地方)自治体では、科学、芸術関係の社会教育活動課題解決先きをどこに求めているのか、それを観てみることに、さらに、

(2)科学・芸術ジャンルは、本道の文化行政の中で、本道を代表する情報源として登場したものである。それが、大都市に集中して大展開され、地方における中・小都市での延長的展開は、多くの未解決の課題をかかえたままで今日に至っている。

要するに(1)、(2)共に科学、芸術ジャンルにおける主たる社会教育活動のトピックス的なものは何があつたか?それを、外部のものはどう批評かつ援助したか、を報道紙に掲げたものから採り、それらにまつわる若

干の見聞を記してゆこうと思う。¹⁰⁾

(3)

先づ、昭和58年4月1日付朝夕刊紙から昭和59年3月31日付迄の「H」紙、中央紙、地方紙を縮刷版と非縮刷版とに限定して、各頁に目を通す作業から開始した。但し、地方紙の収録、接触においては、メモ日限のズレもあるため、中央紙上に掲げたものを地方紙によって確認のうえ、当該地の教育委員会社会教育関係を訪ね、報道内容から派生するいわゆるレファレンス・プログラム解決はいかになされているのかを当該地住民に問うこととし、その集約を企てるよう務めた。

昭和58年4月1日から昭和59年3月31日までの「H」紙上に掲げた「科学(館)、芸術(博物館、美術館)」関係記事一覧表は末尾に付けてある。その中から、この一ヶ年間のうち地方のこの二大ジャンルで最もトピックス的性格をもつものをとり出しそれを記述したものが以下のものである。(この場合トピックス的性格をどう規定したか一であるが、各当該地方のもつ教育行政執行方針が、年度当初に当該地方自治体議会にて方針案が審議対象になる。その内容と呼応するものが、報道記事となったとき、当方ではそれをトピックス的性格をもつ、とした。つまり、それは、行財政上予算執行権を保持するからである。¹¹⁾従来から関係者間にあつて禁句であつた社会教育活動は「チエと汗」のみで動かざるをえなかつた。今やこの時代は去り、むしろ、社会教育活動費に相当額の予算が投入されぬ限り有名無実の活動になりがちであることは火をみるより明らかである。¹²⁾

さて、毎月のトピックスにあたるものを列挙してみよう:-

- '83年4月・化石ファンは必見(穂別町立博物館),
- '83年5月・美深のチョウザメ標本「天塩川上」実証,
- '83年6月・石炭の歴史村へレクバスさっぽろ青少年連合一,
- '83年7月・「博物館網走監獄」公開。新名所に市民どっと。開館前に。
- ,
- '83年8月・夕張声なき声援:石炭の歴史村ツアーが続々、

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

- '83年9月・格好な学習の場に。〈1周年迎える函館北洋資料館〉、
- '83年10月・動物園に行きます。-ワシミミヅク：釧路動物園に。(浜頓別)、
- '83年11月・人気のS.L.冬の眠りに。小樽鉄道記念館、
- '83年12月・旭川優佳良織工芸館祝賀会前に百万人、
- '83年1月・アイヌと北欧のラップ族少数民族が文化交流へ。白老に資料コーナー設置。フィンランドが橋渡し、
- '83年2月・冬の最北観罪に一役。稚内公園ミニ動物園が誕生、
- '83年3月・けさ「イーグル」死ぬ。北極同行のエスキモー犬帯広動物園(植村氏関係)一。

以上が、主として科学(館)等分類に入るトピックスのものである。我々が、今日、使用している主題分類別コード視点¹²⁾からみてゆくならば、科学・技術発達の歴史的結果から、これら全てを、第四門の自然科学領域に統括したい誘惑¹³⁾にかられるが、博物館、科学館は博物学を母とする学であり、第七門にまで亘る芸術にその主傾向的内容を見出すことが多い。つまり、この逆は何をいみするか—といえば、これらのトピックスから文化財保護法の援用をテコにして、活動記事内容を科学・芸術全般に結びつける工夫、努力をして、派生してくる生活課題を解決する受け皿的社会教育施設としての図書館、博物館、科学館、美術館などのもつ資料が、記事をよみ深く調べたい利用者の資料の領域が、第七門に於て第四門と同等に、またはそれ以上に質・量共に上廻っていないと、報道された活動そのものは単なる一過性の物珍らしさに終わってしまいがちであり、社会教育活動を企画する該当者達は、次から次へとの珍しい活動を運動・連鎖させない限り、受け手の人々から「工夫創造の跡なし」というらく印を押され勝ちになり、加えて弱少予算の補正も不可となると活動停滞も余儀なくされることになる。

ここで、上記、毎月別のトピックスの内容を概観してみると、すべてのもの、つまり四月から(新年度会計予算執行可動月)のスタートは、各地方自治体の前年度予算計上及び補助金、助成金、また、財産取得計画¹⁴⁾に対する自然増で構成されていることが理解できる。併せて、或る災害、事件、退役、名所旧跡など文化財保護法の援用をテコにして、活動記事内容を科学・芸術全般に結びつける工夫、努力をしている姿が同

えるのである。たしかに、これらリストでは、「工夫：チエ」が主導型類だが、予算構成費目は各月毎のトピックスともに住民の満足する「需用費」としての枠組みが行政予算上追加補正されていることは、行政の文化化に先手をうって実行している証左であろう。¹⁹⁾

例えば、7月～11月は本道にとっては観光季節であって、その時期とのタイアップ・タイミングを組み合わせ、道外の人々に本道の観光をかねた社会教育活動を展開していることなど…を垣間見ることが可能である。その好例が、7月の網走監獄公開、と11月の小樽鉄道記念館のS.Lの冬眠、さらに、2月の稚内市のミニ動物園など、であろう。これらはすべて、自らの目でたしかめうる‘視聴覚的学習’を前提としたものである。加うるに、S.L.等にしても、閉鎖車庫に納庫完了すれば、視覚的学習の直接的可能性はなくなり、いわゆる写真など印刷物に依存してその学習欲求を満足させることとなる。この点を見学者に伺ってみたところ「本物がみられない(実物鑑賞)」なら学習計画を変更することもやむをえぬことであり、さらに、小樽市民の声としては、「本道最初のスチーム・ロコモティブ(S.L.)がはった地としてのP.R.をかねつつ、そのS.L.を通して、本道中央圏の経済成長の歴史を学習してほしい—が本音である。」と、S.L.をとりまく社会教育活動の裏面を語る。

また、‘夕張市の石炭の歴史村へのレクバス’は、道内各地からの観光客を吸収することにより、夕張市における人心の活性化を計るための方針であることは事実であるが、当市における石炭の村の構造は、いわゆる地学、炭礦学、岩石学、水理学、社会公衆衛生学、そして家政学という分野を駆使して学習理解しうる内容のものである。これらを第一次学習単元とするならば、第二次に求められるものは、交通運輸学、エネルギー資源学(もっと大きくいえば資源環境学)などであろう。本来的には石炭の村を観たあとこれらの第一、第二において関連する課題を解決するための学習施設として、夕張市立図書館や夕張市民センターが存在するが、目立つ蔵書構成は第九部門の文学いわゆる小説類が主流を占める。地域の産業構造に見合った社会教育施設は設置したが課題解決資料内容の質の問題である。かりに、レファレンス・プロブレム解決のための受け皿の存在が理念的にえがかれているのだとしても、スタディ・オン・ラインが切れてしまっている事実を見逃す訳にゆかない。

また、「美深のチョウザメ標本「天塩川そ上」実証」では、チョウザメの存在は、昔から智恵文智東アイヌの人々の間で、おそれられていた大きな魚類の怪物の一つである。古生物ならびに古代魚類、考古学、魚類学、民俗学などの総合的な学習の混入があつて初めて、チョウザメ標本の作製も期待通りのものとなる。また、第二次的には、河川学、湖水学、古喜の伝承口話の確証などの組み合わせ学習があつて、この報道の行間を理解することが可能と思われる。むしろ、この報道によつてもたらされたことは、このようなチョウザメが昔ここに棲んでいたとされることから、当地の人々の反応は、いかに天塩川なるものは古い河川であり、それが今日の道北の街美深を形成するに至ったか、その間の歴史の経過を児童・青少年にも理解してもらいつつ、将来への街づくりに役立てていただきたい——という人口過疎対策にハドメをかけるひとつのカギとなる社会教育活動の認知行動でもある。古老によるチョウザメの談話会がひらかれること、さらに郷土家の実証的発言、修復にあたる技術者の力量の問題、など、第一次に要求される学習内容は道北地方に鉄道が敷かれなかった当時の河川交通による船舶往來の交通学、屯田兵最北の地土別からさらに深い道北地理、米作の北限地帯をはるかにこえる地域での住民の生活史（農学、林学応用による開拓史の学習）の状態、第二次的には、鉄道が敷かれてからの砂金業と林業とによつて街がささえられる裏面に介在する飲食娯楽関係の風俗の発達など、それらを、時代の流れに合わせて記述・記録した資料による学習が総合されて、「チョウザメ天塩川」の報道記事ひいては、美深町におけるこのトピックスを中心としての一連の学習による社会教育活動が連鎖反应的に展開する。このトピックスでは、チョウザメが美深の天塩川で散見されぬいま、視覚に訴えて本物や実物の泳遊をみることはできないもののひとつである。やむなく、写真コピーと、時代考証人による証言によつての修復が唯一の手掛りとなるものであり、これらの関連仮説を実証づける資料展開を当地の教委会において試みてみたが、それは公民館図書室においては不可能であった。たしかに社会教育法の中において公民館の位置づけは比重が大きく、だからといってそこであらゆるものを調べうる資料を内包する事は不可能でさえある。しかし、このトピックス報道によつて、街は、文化財保存面に活性化をとりもどしたが、チョウザメの意義を現代に結びつけるそ

の仲介的資料の所在不明から一過性のもので人々の頭の中から消え去っていった。当地の人々は、このトピックスを中心にして、昔から現在に至る学習をこの機会に実践して欲しい、という要求をもっている数人の識者にあうことが可能であったが、その学習のための予算計上は行政上不可ということであった。その大きな理由は、赤字路線廃止防止運動というキャンペーンからみたとき比重はあまりにも小さすぎた、ようである。それと併せて考えられることは、赤字路線廃止防止運動によって交通量が増えることになれば当然、人口増加も予想され結果的にはその増加率によって交付金増額もみられ、必要にして十分な社会教育施設の設立も可能となる、という筋書きである。このあとに、本当のいみでの社会教育活動が可能となる——という当時の住民の声もいまだに私の耳に残るものである。¹⁶⁾

以上、数例を掲げて、スタディ・オン・ラインをみてみたが、では、これらトピックスを閲読した他所の自治体の反応はどうであったか？異口同音にしていうことは、「私共のところも同じことがいえる。」¹⁷⁾ということであった。

第一：「社会教育活動といわれるものは、巾がひろくてつかみがたいけど、目新しいスケジュールがあると行ってみたいもなる…但し、金にかかるし、時間はとられるし、つまりは、生活がもう少し楽にならないと、誘いがあっても、〇〇サークルなどやる気になれないのです…。」

第二：「調べたくとも、どこにいったらよいかかわからんし、図書館や公民館へ行っても本は少ないし、最近新しい建物にもなったが、図書資料の内容は相変わらず小説ばかり。また、家族全員で集まることもないから、あつまったら次はどこに転居しようなどそのようなことを考えると頭がいたくなります…」などが答として示された言葉の例である。¹⁸⁾

(4)

毎月のトピックスすべてについて順を追って述べることをさけたが、83年4月—84年3月までの分類は、資料分類からみると(主題N.D.C.)、第三門が1ヶ、第四門が5ヶ、第五門が5ヶ、第六門が1ヶ、合計12ヶとなる。第四門と第五門が多いことは、本道のこのトピックスでみる限

り、自然環境と工業に重点を置いた生活環境領域内にあることを物語っていないであろうか？これで全てをおしはかる愚かさを排さねばならぬことはいうまでもないことであるが、本道の社会教育活動の主点は意外にも経済基盤の不安定性からくるものが必然的に学習活動の内容を占めるものが多く、たとえ、科学、芸術という二大ジャンルに限定しても、この領域外に出るものはあまり多くない。例外とすれば、別リストの左側にかかげた、昔から絵画など伝統のあった地域での絵画展、作品展など、さらに、道立近代美術館の普及力によって、旭川、釧路、函館、辺りへの絵画展が、また、音楽会などが主流を占めるものであろう。

こういい切ると、「H」紙の一ヶ年間の掲載物のみから判断するのは樹をみて森をみないおそれなしとは、いい切れないという批判をうけよう。

しかし、このことは報道機関紙に向けられる言葉でもないことを改めて記さねばならない。参考にして我々が注視せねばならぬことは、報道機関がもたらしてくれたこれらトピックスを、他地方自治体に居を占める民間、公的社会教育活動・企画担当者が、如何ように、わが街にそれらを取り入れ、情報交換というネットワーク、巾広く教育機関の手をも借りて視聴覚資料作成段階までもってゆくことが可能であるか—という課題にかかってくるように思われるのである。

このことは、情報化社会といわれて久しいが、情報量が多くなればなるほど、我々は、それらのかげにひそむ本物の実体をこの目でみたい、という人間の欲求を抑えつけることは不可能に近い、ということである。¹⁹⁾ (本物を観る目を養う方法が、I. N. S. の時代に入ってどう形成されてゆくのか、私にはわからぬことが多い、というのが、本当の気持ちである。)

道内「H」紙が日々、我々、社会教育関係学習者に刺激剂的資料を提供してくれることは、実にありがたいことである。それをもとに、私自身がそのトピックスを識って、現場に足を向けたくなるのも学習の一方法である。また一方、上に記したスタディ・オン・ラインが、報道機関を通して、行政とは別個のルールで、形成されてゆくことも必然のように思われる昨今である。しかしこのことは、大都市と中・小都市（地方）とで、各々の良所を互に採りあわぬ限りスタディ・オン・ラインの共存共栄 (co-operations between Studying-Institutes) は無理ではなかる

うか、と思う所似でもある²⁰⁾

(5)

以上述べたことで、全道的に日常実践されている社会教育活動の全部を知る方法が、現在まだ確立されていないのであるが、記録性の特長をいかした報道紙に掲げる社会教育活動関連記事をひもとくとき、不完全ではあるが一つの傾向を把握することはできるように思えるのである。しかし、それらの活動は自治体のものであれば、行政方針の中の予算面との裏付け協同路線にあるものか否か、を存知することも重要である。というのは、報道記事をよみ、それらのよさを己れの地域に再実現しようと試みても、各々がその地元の体臭、風俗習慣からうまれたものであれば、その再実現は不可能という言葉を与えるかもしれないのである。そこで、不可能を可能にかえる必要もでてくる。

また、スタディ・オン・ラインを試みるとき、主導者的存在となる情報を与える諸道具²¹⁾の不整備が、そのまま残存するならば、その不整備の網の目から落ちこぼれてくる活動を救うものが受け皿として用意されていなければならない。新聞・報道機関紙は、報道という役目の中に必然的であるのかも知れぬが、受け皿的働きをも提供しているといえよう。以上、二大ジャンルに限ってのものであるが、かいつまんでのべるならば、住民は、各々の立場で記事をよみ、Invisible Study Circleがそれをキャッチし、さらに記事内容を深く追究してゆく刺激を与えはするが、継続学習をメイン・サブジェクトに従って遂行しようとするとき、study-on-lineが切れている現状、と概観できそうである。了

注

- 1) 藤岡英雄, 大串兎紀夫, 小平さち子共著「日本人の学習関心〈学習関心調査・報告1〉」, 『放送研究と調査』, 昭和59年5月号所収。
- 2) R.H.Helmreich, "Psychological Considerations in Future Space Missions", In : The Human Factors in Outer Space Production. Amer. Asson. for the Advancement of Science, Washington, D.C., 1980 ppl.23.をよむと、いわゆる Edgar Dale の“経験の円錐段階”説で理解できることであるが、我々の他人理解には円錐基底部に「共通の

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

具象・具体的体験から経験への存在が大前提であるが、さらに電信・電話の普及に伴い、見知らぬ人との語り合いが可能になるのは、我々のもつ Audio-Visual Sensibility が機能するためと考えられる。

それ故に、「少しまてば読める」から「いま直ぐ読める」、に変遷していった背景には、文字の普及と並行する印刷文書の普及があろう。参考になるものとして、ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳、「世界文学をどう読むか」、新潮社、新潮文庫 pp48-54. Ghana Library Board, “Report-for the year 1979-1980 (全75頁)、の中 General Survey が好例をあげている。

- 3) 各地に散見されるカルチャーセンターやカルチャースクールメンバー、さらに、学者・研究者集団成員もこの中に入ろう。各成員の帰属性のつよさ、にみられる仲間意識などでサインをつくりあう。これからおこなわれる“放送大学”などの共視聴者間群は、この Intimate Invisible Study Circle で結ばれるものであろう。
- 4) 藤岡英雄,「生涯学習媒体としての放送」, NHK放送研究と調査, 1984年10月号所収。pp12—25, 参照。
原島進,「INS」〔ミュンヘナー・クライス国際会議原稿〕同会議は1984年11月末 Münchener Kreis でおこなわれる会議。原島進氏が日本代表で INS につき講演されるその発表原稿をご親切にご送付下さったので(昭和59年11月7日),ここで結論を記させていただくが、「過度の情報洪水が、さらに強度の人間疎外をおこしかねない…科学技術と人間社会との真の調和創造の可能性を探ること、この哲学を忘れてならぬ」と結んでいる。もう一つは、読売新聞、昭和59年11月7日、社説「放送大学の可能性に期待する」,が参考になろう。
- 5) 国内各地方自治体が、年度当初に議会に上提し審議するものに、行政執行方針案、がある。これらのうち、教育委員会が上提する教育行政執行方針案中、とくに社会教育については、一様に次のような表現をもちいている：「…今日の社会教育の重要性と、社会教育活動参加者は年を追って深く認識され、かつ増加し、無数といえよう云云。」がみられる。
- 6) 従来、社会教育活動なるものは、社会教育主事の指導・助言のもとに、社会教育関係者が企画、立案、実践してきた。しかしマスコミの発達、社会的人口移動等により、社会教育主事業務内容をアマチュアであっても時に、社会教育主事の力量以上の実技と実践をそなえ、地域の社会教育活動を推進する地域が出現してきた現状を指す。

- 7) 社会教育主事設置を地方教育行政では、義務づけているが、設置をせず、社会教育活動講習を受けた地方公務員が片手間に、社会教育事業を手伝う地域も道内に散見されることがあり、これらの設置不統一が結果的に大きな損失（社会教育活動におけるキメの細かい活動がなされないこと）となってあらわれていることを指す。

古い文献になるが、Herbert Passinは“Society and Education in Japan” (Teachers College, Columbia University Comparative Education Studies. 1965)の中で、“Japan as an under-developed country”なる章を設け、社会教育活動の未熟さは、学校教育活動のそれよりも数倍も劣る、と記述し、社会教育施設、人、資料の整備を急ぐことを指摘した。

- 8) 新聞そのものが、社会教育活動の重要な役割の一端を担う。新聞の記事として、社会教育活動や社会教育施設の活動状況を、報道することは、ニュース価値を付与するが故であろう。ニュース価値を付与された地方の社会教育活動が、報道の受け皿になるという現象は、それだけでもニュース価値を付与された Topics たりうる活動となるものであろう。新聞は、社会教育活動を二重奏的におこなう社会存在物であるといえる。将来に、新聞社が通信教育的機能で、生涯教育機関・センターになる日がくると思われる。つまり、‘社会教育学校’的存在になると、私は思う。I.N.S.がそれをうながすこともあろう。

- 9) 当小論で扱った「H」紙は、今日北海道で最大の発行部数と多数支局を有する新聞社である。我々は、道内各地方自治体が毎日展開している社会教育活動の全てを収録、レコードすることは、現段階では不可能に近い。しかし、道内にくまなく情報収集のネットをはりめぐらした「H」紙上に掲げられたもの（含地方版）をみることによって、かなり大筋の傾向を把握できると考えてよい。

- 10) 地方自治法（昭和22年4月17日、法律第67号）第一条及び第二条第三項以下、博物館法（昭和26年12月1日、法律第285号）第二条及び第三条、社会教育法（昭和24年6月10日、法律第207号）第五条に規定される各項目のうちとくに第七項目以下、等をまとめるならば、道内のいかなる地に居住するとしても同等で好みの社会教育活動を享受できる保障がなされており、社会教育活動に参画・参加しえた人々が、生涯に亘ってその活動から派生した諸問題を印刷物や非印刷物の資料をつかって自主的にかつ積極的に解決できるよう事務組織上は住民権と同様に保障されていることも銘記させることも、社会教育活動の一つと

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

なりうるであろう。例えば、昨今、報道機関から毎日のように流されてくる一村一品運動がある。私の調べた範囲では、大都市では一村一品運動に匹敵するものは見当らず、行政的にも、その実体を指摘することは不可能といい、逆に各地のこの成果展示を實踐して本道のさらなる一村二品から数品運動へと発展してゆく様相を呈している。さらに、一村一品運動に参加する地方自治体住民は、その一村一品の内容が他自治体のそれと競合しあわないよう情報交換し研究・調査を地元でおこなうが、好適な資料が地元で入手することもできず、やむなく、当初立案した一村一品とは異質の一村一品に変更した例も見聞される。

- 11) 前掲社会教育法：第六条第三項、及び文化財保護法（昭和25年5月30日、法律第214号）第三条ならびに第四条参照のこと。
また、社会教育関係活動で一日の長のあるヨーロッパにおいても、社会教育予算の削減に頭をなやましはじめた。CLASSROOM REALISM (THE TIMES: APRIL 8, 1984. 社説) が参考になろう。
- 12) Nippon Decimel Classification (by Japan Library Association)をさす。
- 13) 例えば“World Intellectual Property Organization” (U.N.)が、Protected Worksとして指示しているものは literary works に“oral works-published or unpublished-, that is, works not reduced to writing, are also protected——”を入れていることも合致する。
- 14) 地方財政法（昭和23年7月7日。法律第109号）第二条及び第三条と第十條から理解されよう。
- 15) '83年12月のトピックスのみが公的予算からはみ出している。他のトピックスは全て需用費その他を含め数十万円単位の予算が裏付けられている。関係者の指示により詳表記述をひきかえさせていただく。
- 16) 以上各市町村の市町村要覧をもとに、直接外向き、住民との談話、社会教育実践者（教育関係者）、行政執行方針、の閲覧などを行い、記述したものである。社会教育施設は単独機能をもつものが多く、利用者の幅広い要求を充たすには、各社会教育施設の相互協力が必要不可欠となる。これは、単に我が国のみの現象だけではない。例えば、第14回国際情報学会（隔年開催。本年はプラハ市にて9月開催）でのメン・トピックスは、(a) Implications of the New Technologies for Local Communication, (b) The Characteristics of 'Content' in the Information Society, そして(c) Communication Technology であり、全体を通して Communications 均衡をどう採るか、が大きな課題である、と

いえよう。

また Study-on-line 方式が競争相手をみつけるためには、つねに 'Information は人間によって産み出され、しかも人間は Information によって生活可能となる'が必要であり、次が考えられねばならぬ：-Language Abilities+ (one's contact years with educational institutes×informations remember capacity) ≥ 0 、という図式であるまいか、ということである。

- 17) 同じこと、の内容は、第一に予算の裏付けなくとも毎年の行政推進の一環として、無理を承知で企画・立案をしてゆかねばならぬ—ということ、第二は、事業のマンネリ化打破の方法が見出されずに月日の経過を追いかけてゆかねばなら—ということ、などであり、行政改革の余波をまともにうけていて、機構改革による統廃合が落ちつくまで、心さだまらぬ——が全てを云い尽している。
- 18) 過疎地域振興特別措置法 (昭和55年3月31日。法律第19号) と地方自治法別表第一都道府県が処理しなければならない事務、とを併せ参照されたい。
- 19) 我々のものとなしうる情報の量は、つねに直面するいかなる情報の内容をも理解できうるに等しい量、ということが大前提である。つまり'83年7月のトピックスの例は我々が知識として既得しているものを実際にたしかめる、という学習が働いている。その対象物が、共通体験のものでなくても、である。故に、'83年12月のトピックスも同様のことがいえよう。'83年4月のトピックスを他所ではどう扱え認識したか、を記すと、必ずしもこの関係の成人のみが興味を示したのではなく、室蘭、旭川、函館等遠距離の科学館がそれらを識りたがったこと、また、Invisible-Study-Circlesとして、東京国立科学博物館からの問い合わせがあった事実が確認されている。
- 20) 単なる大都市、地方中・小都市という都市社会構造の比較であってはならず、各地に設けられている同一の社会教育施設が単独施設か複合施設か—という機能上の協同作業が可能か否か、に依存している実態を見極める必要がある。単純化した観方として、職員一人の場合の守備範囲は、二人になるとどれだけ範囲は拡大するか—ということであろう。
- 21) ここでは主として、Study に要する Lists (bibliographically analyzed lists for investigations) と理解していただきたい。これの好例として、英国の Workers Educational Association (WEA) がつくっている

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

Literary Advisory Reading Books Listがあげられよう。他方、a national libraryの働きの一つとして、“すべての種類の図書館、研究所に対する書誌的援助”をあげており、WEAとa national libraryとのつながりの接近がみられる（K. B. Gardner: the British Library-present and future. 1977）源動力は何であるのか、改めて考えてみたい。

北海道内地方科学館、博物館・美術館関係活動 報告メモ

〈'83・4・1～'84・3・31「H」紙〉（作成・記録：斉藤）

日付	道内美術館他	道内科学館・博物館他	日付
		〈特集〉ところどころ	4/3
		化石ファンは必見(穂別町立博物館)	
		〈市民版〉スタジアムご披露(photo)	8
		イルカも落成ジャンプ(小樽水族館)	
		〈社会〉見せませ“夏の流水”(網走市立流水館)	10
4/11	〈学芸〉美術メモ (小樽)森田正史水彩画 100選展 (旭川)パリのキツチエ (網走)チャーチル網走八品 展 佐藤忠良展	〈社会〉人寄せイルカ 初日から盛況 (おたる水族館)(photo)	11
		〈社会〉天然記念物シマフクロウ七世 に期待、抱卵一ヵ月にも(photo)(釧路動物)	15
		〈社会〉“雄の本懐”果たして死ぬ、釧路市動物園のタンチョウ野生ツルと争い、初ヒナ誕生絶望的に(photo)	19
		〈地方〉華麗なタンチョウのはく製を展示(厚岸町郷土館)(photo)	23
		〈P9〉大きくなれサーモン、三代目「キング」飼育中(おたる水族館)淡水魚レイク トラウトも(photo)	26
		〈社会〉二世の夢お預けに、シマフク	

		ロウの抱卵失敗(釧路市動物園)	
		<P11>指でなぞればOK稚内に電光 らくがき版(稚内市青少年科学館)	30
5/4	<社会>郷土に映える故中村 善策名画 小樽美術館で追 悼展(photo)		5/4
	<学芸>ガラス工芸展(旭川) (網走)佐藤忠良展		9
		<社会>ワレら個性派類人猿, ゴリラ など五頭先着 来月張り切って登場 (釧路動物園)	11
		<社会>全道青少年科学館総会開く (釧路)貴重さ“キャビア並み”と大 鼓判。美深のチョウザメ標本「天塩川 そ上」実証。東京の専門家(photo)	
		<人・北の創造者-④>photo「連綿父 子二代の願い」米村哲英(網走市立郷 土博物館長)	13
		開館間近に機器搬入	21
		増毛のエネルギー科学館(photo)	
5/23	<学芸>小樽:写真4人展 旭川:ミユールレアリスム の巨匠たち展(旭川美術館) 開館一周年記念		5/23
	<学芸>小樽:絵画同人展		30
		<市民版>外壁の傷み, かなり。重文 の小樽市博物館修復調査が最終段階 (photo)	6/1
		<P11><情報>楽しいエネルギー科学 館, 道内初増毛にも開館5月28日オ ープン(photo)	4
		<社会>自然児ハクチョウ(釧路市動 物園)(オオハクチョウ二羽が自然繁 殖でふ化)	
		シカを悲しませないで! 行楽客の残 飯にカラス群れ, バンビが犠牲に。 「ゴミを持ち帰ろう」北見・自然休 養村(photo)	
6/1	<小樽>高橋捷三回顧展 小 樽美術協会15周年記念展 8	<社会>静内アイヌ文化ひと目で:民 俗資料館が開館(photo)	6

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

—12日		〈社会〉噴火標命名のプロビデンス号 パンの木の苗積んでいた。船内に野 菜畑・豚舎。 (室蘭)民俗資料館、再現資料まとめ る“最新”の経度測定器も(photo)	8
6/13	〈小樽〉一聖会展	〈P18〉我ら“類人猿貴族”, 寝ぐら超 豪華 釧路市動物園で公開(photo)	10
		〈社会〉大作・飛翔(彫刻)など一堂に。 旭川で山内杜夫遺作展(photo)	13
		〈博物館網走監獄〉来月6日オープン	16
		札〈地方〉石炭の歴史村へレクバスさ っぽろ青少年連合	18
6/20	〈小樽〉嶋田観個展		20
6/21	〈学芸〉旭川「シュールレアリ スムの巨匠たち展を前に。 最も自由な芸術運動・独自 性の強さは共通(photo)小 谷博貞(面家)		
6/25	〈札・近〉幻想の世界誘う シュールレアリスムの巨匠 たち展開館。一周年の旭川 美術館	〈社会〉街づくりとのかかわり求め… 道博物館大会開く(岩内)	25
		「博物館網走監獄」公開。新名所に市 民どっと、開館前に(photo)(地方版 ニュースから)	7/2
7/4	(旭川)シュールレアリスム の巨匠たち展 (小樽)蜂の巣展 (網走)道書道展移動展	〈市民版〉 開館20周年で四経の特別展：小樽市 青少年科学技術館(photo)	7/4
		囚人労働の歴史残す：博物館網走監 獄オープン(photo)	6
7/9	展らん会 シュールアリス ムの巨匠たち展(photo)		9
7/11	学芸 美術：小樽水彩画会 展13—17日		11
		木旺プラザ よみがえる明治の陰影・博物館：網 走監獄そちこちに囚人の声(photo)	14

		5 leaves)	
		<社会>ここにわが青春が…(photo)	17
7/18	(小樽)彩夏展 (網走)写真道展移動展→20日	小樽市博物館で9.5ミリ映画展 オールドファン懐かしそうに見学	18
		photo	19
		有島文学求め十万人(有島記念館)	
		<市民版>水族館 それに運河で…小樽まつり一色	22
7/25	<学芸>小樽現代美術作家協会 北海道作家展→31日		25
8/1	<学芸> 旭川・シュールレアリスムの巨匠たち展 小樽・空を飛ぶ仲間たち展	<社会> 夕張へ声なき声援石炭の歴史村ツアーが続々(photo)	8/1
8/8	旭川・ピカソ陶芸展 小樽・パタパタロール展→14日		8
8/13	<家庭>ユニークなパタパタロール展 小樽市立美術館(photo) だれでもが何でも出品 合作「オッパイおぼけ」も!	<学術>'83ほっかいどう 賑わう博物館網走監獄：眼を奪うリアリズム山谷一郎(郷土史家網走市在住) <photo>トラのヒロコ大往生、おびひろ動物園21歳9ヵ月、人間でいえば100歳長寿世界一ハク製として保存へ	13
15	(小樽)道新文化センター作品発表展→21日		15
		<社会>「オット君」「セイ君」おたる水族館2頭のオットセイの名前決める	21
22	(学芸) 小樽：小樽水彩同好会展		22
29	(小樽)写真道展移動展 〃 河凍会書道展		29
31	市民版：中村善策さんの作品届く 絵36点と遺品(photo) 市立小樽美術館。		31
9/5	<旭川>ピカソ陶芸展 <小樽>一橋会、一彩会合同	<市民版> 「緑の相談所」に園芸パンフ：小樽市	9/5

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

	展 〈網走〉佐藤秀雄個展	手宮緑化植物園(photo)	
		地方版ニュース 格好な学習の場に。1周年迎える函館・北洋資料館。	10
		魚屋に“ミニ水族館”石狩100匹スイスイ「観光PRにも」〈石狩・市民版〉	16
19	〈学芸美術メモ〉 〈小樽〉青洗会展〈網走〉 新道展移動展		19
16	〈旭川〉柳原義達展 〈網走〉MOAオホーツク文化展→28日		26
		〈社会〉釧路市立博物館の化石：3500年前のバクだった、新種クシロムカシバクと命名日本では貴重品	10/1
10/3	〈旭川〉柳原義達展 〈小樽〉市展 〈網走〉国際絵ほんまつり		3
		社会(photo) 城の刑の資料展示館・釧路で「鳥取百年館」着工。 動物園に行きます：ワシミミズク：釧路動物園に(浜頓別)	5
		10万平方メートルの文化公園 苫小牧市かけ足へ 〈室蘭〉水族館のペンギン赤ちゃん姿は一鳥前	8
11	〈網走〉子ども創作展、書展→18日		11
17	〈小樽〉書道市展 〈網走〉子ども創作展・美術		17
18	〈社会〉第2の道立地方美術館誘致合戦燃える：函館、室蘭、釧路、帯広、「旭川に続け」と名乗り。道に陳情あの手この手		18
21		〈社会〉 きょうから多喜二展、小樽文学館。	21
		〈社会〉	22

		オオハクチョウやはり“自然の愛”園 内初の繁殖に成功<釧路市動物園>抱 卵させたら「育った？」人工ふ化で失 敗の連続(photo)	
		<社会>新発見の手紙も公開<小樽文 学館>で多喜二展(photo)	10/22
10/24	<旭川>日本画所蔵品展 <小樽>市文化祭写真展 大月源二展 <網走>市民創作展		24
		<火旺ぶらざ> オープン近い釧路市立博物館 湿原の魅力一堂に精巧に自然を再現	25
31	<網走>北方書展<学芸>		31
		<社会>釧路博物館 <市民版>人気のS L 1冬の眠りに。 小樽鉄道記念館	11/ 1 2
		<社会>湿原パノラマ、四千超す展示。 釧路市博物館が開館(photo)	3
		<社会>早速、長蛇の列 釧路市立博物館オープン	4
		<地方版ニュースから> 国の文化財指定価値は十分。旧旭川 偕行社 <博物館>	5
11/ 7	<網走>北乃書展		7
		<社会>オット君すくすく おたる水 族館 オットセイの赤ちゃん生後130 日国内成育記録を更新中(photo)	16
		<市民版>ジャンプ抜群の力 おたる 水族館 カマイルカが特訓中(photo)	25
		<P 7>開拓期の農家、再現着々進む ムロランの民俗資料館(photo)	26
12/ 1	'83ほっかいどう 旅する現代美術：旭川から の発信一荒		12/ 1
5	井 善則 (旭川)日本画所蔵品展(道 立)	<社会>祝賀会前に百万人 (旭川、優佳良織工芸館)	5

道内「H」紙に報道された社会教育活動の一側面

26	(旭川)木の椅子は語る展 (道立美) (小樽)所蔵素描展(市立美術館)		26
		<社会>日本記録だホット君 おたる水族館生後100日「繁殖賞」頂き!	'84 1/4
'84 1/6	<社会>木の椅子は語る展 (旭川)	<社会>アイヌと北欧のラップ族少数民族が文化交流へ：白老に資料コーナー設置。 フィンランド協会が橋渡し。	6
9	(小樽) 小樽美術協会新書展→15日		9
		<P1>道立地方美術館—館目は函館に。五稜郭に隣接。60年度開館。	1/13
17	<小樽> 桜井書道教室会員展 <網走> 道教職員美術展		17
23	<学芸> (小樽)Snow-man show'84		23
		<社会>ホッキョクグマが元気な赤ちゃん(釧路動物園)	26
2/2	<社会>兵馬備夕張市が所蔵複製品とはいえ国内唯一「永久保存出来る施設を」道立美術館誘致働きかけ		2/2
		冬の最北観光に一役。稚内公園ミニ動物園が誕生	4
5	<総合>道立函館美術館本決まり 61年度オープンへ	<社会>はかない命 北のキリン(旭川市立旭山動物園)(photo)	5
6	<旭川>木の椅子は語る展 <小樽>工業高校工業展 <網走>市学生書き初め展		6
		<ふるさと通信> シロフクロウ動物園で保護(釧路市動物園)	13
		(学芸)(遠軽)木村晴一油彩画展：町郷土館	
		<P18>水槽併設 魚も展示	17

		白老アイヌ民族博物館。	
		〈地方版〉	25
		十勝平野を一望に。大空中観覧車を建設へ。帯広動物園。	
28	(旭川)子どもと親の美術館 '84 (小樽)七芽展 (網走)木村昭平, 富沢裕子 2人展		28
		〈市民版〉	29
		ただ今, 特訓中。おたる水族館のオタリア「成果, 見てね」	
		〈社会〉白老ラブ族の資料届く。四月から博物館で公開。	3/4
3/5	(小樽)テール美術教室作品 発表会。	(遠軽)木村晴一油彩画展(町郷土館)	5
		〈市民版〉イルカと一体ガンバ(photo)	7
		新人マリンガール特訓中おたる水族館	
		〈P19〉けさ「イーグル」死ぬ。北極同行のエスキモー犬, 帯広動物園(植村氏関係)	8
		〈市民版〉春に向けてジャンプ トド訓練スタート(おたる水族館)	3/14
			26
3/26	〈小樽〉 富澤謙油絵個展→4/1		
		〈社会〉五万人が湿原学ぶ(釧路市立博物館)(photo)	31
		〈P7〉〈地方版〉	
		ホシチョウザメも仲間入り(小樽水族館)	
		道都大学に海洋生物研究所(ミニ水族館)	

Title: Some aspects on Continuing Adult Education Activities in Hokkaido in 1983.

by Tsutomu Saito

Today various and several adult education activities in Hokkaido have been acknowledged and reported in the Daily Newspapers. Their activities have also been very much complicated for the communities' personalities in each local society.

In this paper, however, two categories' activities have been surveyed. They are Natural Sciences and Arts fields. Even two categories were enough too much for me. Therefore, twelve activities (an activity per a month) among them have been selected and cited from the Hokkaido Shinbun (annual edition) along the local governments' past-annual budget calendar in 1983, on Adult Education.

Each activity, when it was reported in the Newspaper, was much interesting and stimulus to the local people as to give them chances to investigate more accurately the reported topics by some other learning institutions there.

Obtained remark is the helpful co-operations between institutions in the fields of reference materials have not yet been established up nor prepared for living people there. On the other hand they have insisted on that Reference Institutions for studies for them should be the indispensable ones in any local area throughout their whole-lifeworks.

So, my addressing is Local Educational Authorities in Hokkaido should more profoundly recognize the hidden true desires and studying-mind among people there whenever it may be convenient for them.

北星学園大学文学部北星論集第22号正誤表

頁	誤	正
4	(本文9行目) 要素の数 <u>全体数</u> を	要素の数 <u>全体</u> を
185	(本文1行目) Some <u>aspects on</u>	Some <u>Aspects of</u>
193	(本文17行目) NP <u>Ving</u> …連鎖は	NP <u>V</u> …連鎖は